広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第38号　2010．3〉

英語科における教育実習の到達目標の設定（Ⅲ）

松浦　伸和　小野　章　池岡　慎　大野　誠
川野　泰崇　千菊　基司　多賀　徹哉　山岡　大基
山田佳代子　幸　建志

１．はじめに

（１）研究の背景

世界中でこれほどまで学力が注目されている時代はない。生徒の学力向上を目指す際に，教師の質の向上は大きな要因である。それは，カリフォルニアやニューヨークなどアメリカの多くの州や，PISA調査の結果で注目を浴びているフィンランドで，教師に修士号を課していることでもうかがえる。我が国においても，教員の質の向上が叫ばれている。教職大学院の創設や免許更新制の導入などがその現れである。

だが，残念なことに，我が国では教員免許状の取得には，所定の単位を修得するだけであるため，質の保証が十分でない。大学により，担当教員により単位認定の基準が異なっているためである。やはり一定のスタンダードを設定し，それに到達した場合にのみ免許状を取得できるシステムにシフトする必要がある。

（２）研究目的

本研究は，学部レベルで英語教員を養成する際に，教育実習における到達目標を具体的に設定することを目的とした３年間の研究である。

第１年次には，「教科の指導能力」を焦点化して，授業運営能力を評価する際の評価規準を見出した。第２年次には，評価規準を再検討して整理するとともに，評価規準ごとに３段階の到達レベルを策定した。

最終年度にあたる本年度は以下の目的で研究を行った。

①教育実習生の授業（以下，実習授業）を，「到達目標」の基準に従って評価するための評価シートの作成と改訂。（資料３）

②評価シートが教育実習生の実習授業の評価と同時に実習生への指導のために，機能的，かつ，効果的であるかの検証。

２．研究方法

（１）評価シートの作成と改訂の経過

・６月実習前
教育実習生の授業を評価するための，評価シートを作成した。

・６月実習期間中（評価と指導の試行１）
評価シートを実際に使用して，実習授業を評価し，反省会での指導を行った。さらに，DVD－Rに収録した実習授業を，評価シートを使って評価した。評価の結果を集約・分析し，評価シートの評価項目等の整理・調整をした。

・９月実習期間中（評価と指導の試行２）
６月実習をもとに改訂した評価シートで実習授業の評価と指導の試行を実施した。DVD－Rに録画した実習授業を評価した。その結果を集約・分析し，評価シートの評価項目等の整理・調整をした。

・10月実習期間中（評価と指導の試行３）
９月実習で評価シートの改訂があった場合は，さらに評価と指導の試行を実施する。

（２）評価対象

実習授業の評価は英語のどの実習生に対しても，また，英語のどの科目でも使用できることが必要である。そこで，DVD－R収録による評価の試行では以下のように対象となる実習生と実習授業を決定した。

・実習生の所属学部・学科は考慮しない。

・対象とする学年・科目は中２・中３の「英語」，高等学校の「英語Ⅰ」「OCⅠ」「英語Ⅱ」「リーディング」とする。

（３）評価シートによる評価と指導の方法

・評価シートの記入方法
評価シートの各評価項目に対し，昨年度策定した評

Nobukazu Matsuura, Akira Ono, Shin Ikeoka, Makoto Ohno, Yasutaka Kawano, Motoji Sengiku, Tetsuya Taga, Taiki Yamaoka, Kayoko Yamada, Kenji Yuki: Developing attainment targets in teaching practice for English teachers（Ⅲ）

価規準に照らして，以下の方法で記入することとした。
「よく達成している」場合は「○」,「概ね達成している」場合は「△」,「不十分である」場合は「×」で評価する。
指導上必要と判断した場合は,備考欄にメモを残す。
・各実習授業の指導における評価シートの試行
８名の教員が，それぞれ担当する実習生の実習授業を観察しながら，評価シートに記入する。反省会では評価シートをもとにした指導も行う。
・DVD－Rによる「評価」の試行
DVD－R収録した６科目の実習授業を８名の教員が評価する。

（４）教育実習生への告知

教育実習生には評価シートを用いた実習授業の評価を指導に加えることを事前に告知する。これは，教育実習生が何に留意して指導案を作成したり実習授業を行うかを明確に示すことになるからである。

３　『評価シート』の基本理念と作成

評価シートは，次の点を念頭に置いて６月実習前に作成した。

（１）『評価シート』の基本理念

①実習授業中に，指導教員が，観察しながら記入できるものであること。すなわち，直後に実習生を指導できるように簡潔であること。実習生の立場からは，分かりやすいものであること。
②評価の信頼性を高めるために，評価項目の表現を的確なものにすること。
③「評価項目」ごとに評価を行うが,それぞれの「評価規準」が全体としても概括的な評価を行うことができること。

（２）「評価項目」の決定

作成に当たっては，昨年度策定した評価規準をもとに評価項目を決定した。評価者による解釈のゆれが生じないように，表現の言葉遣いにも細心の留意をした。できあがった評価シートの評価項目は以下の通りである。

（１）教師の英語

・明瞭でわかりやすい英語を話している。
・誤りがほとんどなく，あっても言い直している。
・不必要な日本語がない。
・生徒の学力を考慮しながら英語を使用している。

（２）指導技術

・様々なタイプの活動をさせ，生徒が英語を多用している。
・計画に基づき，内容を反映させる板書である。
・視聴覚教材を適切に用いている。
・自然な言語活動の場面を意識した活動をさせている。
・板書に一貫性があり，内容が整理されている。

（３）授業運営

・常に全体で考え方を共有させている。
・机間指導をし，苦手な生徒をサポートしている。
・生徒の様子を確認しながら，授業を展開している。
・生徒の活動状況に応じ，柔軟な対応をしている。
・生徒をよく観察し，生徒の理解に応じた対応をしている。
・生徒の学力差を意識し，基本的な活動から発展的な内容まで取り入れている。

（４）諸活動のつながり

・目的を達成するために活動に有機的なつながりを持たせている。
・活動は易から難へと移行しており，学習者に過度な負担となる飛躍がない。
・板書を使い，活動の関連がわかるようにしている

（５）生徒の応答への対応

・生徒の誤りを予測し,原因を考えた対処をしている。
・生徒の理解に応じて臨機応変に説明を加えている。

（６）内容理解の展開

・本文をパラフレーズする発問などを含め本文理解を深めている。
・生徒の考えをもとに説明を組み立てている
・文化的背景の説明や，教科書の表現に基づく解釈の説明がなされている。

４　研究の経過と『評価シート』改訂のポイント

（１）経過

６月実習で行った試行では次のことが明らかになった。

①『試行シート１』を使っての実習生への指導に関しては「この課題（評価項目）について～である。特にこの場面で良かった／不十分な点が認められる。・・・のように改善してみてはどうか」というように指導でき，効果を認めることができた。
②DVD－Rの評価の集約を分析すると，評価にばら

つき（ブレ）が見られた。特に，中学の授業と高校の授業というカテゴリーで分けると，ばらつきに差が出た。

従って，このばらつきの分析とそれを基にした評価シートの改訂が９月実習に向けての課題となった。

９月実習では，改訂した評価シートを用いて実習指導とDVD－Rでの評価試行を行った。指導については６月と同様に効果を認めることができた。

DVD－Rによる評価では，実際的理由から対象とする授業を中学２年生と高校の英語Ⅱに絞った。評価の結果は，６月実習に比べるとはるかにばらつきが小さくなっていた。さらに評価の精度を上げるための改訂を10月実習に向けての課題とした。

10月では再改訂した評価シートを用いての指導と評価の試行を実施した。結果は，ばらつきはきわめて小さくなり，今後の実際の運用に耐えうるものであることが実証された。

（２）評価シートの改訂のポイント（資料２）

６月実習における評価シートによる評価試行では同一授業，同一項目で評価のばらつきが出ていた。この評価のばらつきを「ブレ度」と呼称し，３つの段階に分けた。

・評価が「○」～「×」まで出ていたもの　ブレ度「大」
・「○」「△」，または，「△」「×」に分かれ，かつ評価の数に差が無かったもの　ブレ度「中」
・評価が全て揃っていたものや評価が分かれたが，その数に有意な差があったもの　ブレ度「小」

６名の実習生のそれぞれの評価項目についてブレ度「大」となったものを評価規準別に合計しその占有率を計算したところ，以下の通りとなった。

計算方法は，例えば，「教師の英語」であれば「評価規準」は４つであるので，全体で24を母数とする計算を執った。

・（１）教師の英語　38％
・（２）指導技術　47％
・（３）授業運営　56％
・（４）活動のつながり　84％
・（５）生徒の応答への対応　67％
・（６）内容理解の展開　88％

検討の結果，これらのブレは，評価者（指導教員）の教員経験年数や教育実習指導経験年数の違いや授業観の違いに起因するものばかりではなく，各「評価項目」の表現や，「評価項目」間にある重なり（類似性）が，「評価」時に，迷いを誘発するものである可能性が高いことが判明した。

また，実際に観察しながら評価してみると，評価項目として妥当性に乏しいと感じられるものもあった。いわゆる違和感を感じながら評価したためにばつきが生じたのである。

このばらつきを改善するために試行シートの改訂作業に入った。改訂のポイントは以下の通りである。

①評価項目の重複の解消
②評価規準の表現を変更
③評価項目の移動
④評価項目の削除
⑤評価規準の削除
⑥評価項目の追加

（検討の過程は資料２で示している。①～⑥の番号は上記の改訂のポイントに対応している。

検討の結果，９月実習に向けて次の５つの評価規準で評価シートを作成した。

（１）教師の英語　（２）指導技術　（３）授業運営　（４）活動のつながり　（５）生徒の発言や活動への対応

９月実習での改訂は次のポイントで行った。

①評価項目の表現を変更
②評価項目の変更

10月実習では評価シートの最終版を作成した。

その結果，次の評価規準となった。実際の評価シートは資料３に示している。（５）は，表現としてシンプルでよいという意見の一致から変更を行った。

（１）教師の英語　（２）指導技術　（３）授業運営　（４）諸活動のつながり　（５）生徒への対応

さらに，実際に実習授業を観察しながら，評価をするに際しては，ばらつきを防ぐための最低限の共通理解が必要ということで，評価シートの留意点一覧をつけることとした。（資料１）

５.おわりに

本研究では，３ヵ年で「英語科の教育実習における到達目標を設定する」ことが目的であった。到達目標を設定したことは，同時に教育実習生への指導内容を明確にしたことでもある。実習生に対し，事前に評価シートを提示することで実習生が，何に留意して指導案を作り，授業を実施すればよいかがイメージできる。

また，指導教員は，評価シートを基に，授業終了と同時に指導を行うことも可能となり，指導の即時性が高まり，実習生の授業技能の向上に効果的な働きをすることが期待できる。

当英語科では，実習生のグループ１つに対して複数の教員が指導に当たることにしている。従って，１人

の実習生を２～３名の教員で観察することになり，評価の信頼性をより高めることができるのではないかと考えている。

本研究により，すでに策定さている「教育実習広大スタンダード」と組み合わせて，教育実習の効果的な指導と適正な評価が可能となる。

引用（参考）文献

愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター（1999）『大学にとっての教育実習』カリキュラム改革研究プロジェクト

中央教育審議会（2006）『今後の教員養成・免許制度のあり方について』（答申）

日本教育大学協会（2007）「教員養成カリキュラムの到達目標・確認指標の検討」研究報告

国立大学法人横浜国立大学教育人間科学部（2007）『YOKOHAMA STANDARD 小学校教員養成段階における資質・能力の観点別評価規準　スチューデントティーチャー・ガイド版　2007年度版』

日本スチューデント教育大学協会（2007）「教員養成カリキュラムの到達目標・確認指標の検討」研究報告書

松浦ほか（2008）「英語科における教育実習の到達目標の設定（Ⅰ）」『広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第37号 pp.59－65

松浦ほか（2009）「英語科における教育実習の到達目標の設定（Ⅱ）」『広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第38号 pp.59－62

（資料１）留意点一覧

評価の領域	評価項目	留意点
教師の英語	正確な英語を使用している。	発音・文法など英語に関することを評価の対象とする。
	既習事項に配慮している。	
指導技術	教具や教育機器を適切に用いている。	
	整理された板書である。	ワークシートは教具の一つである。
	発問は適切である。	量・質ともに評価の対象である。
	説明は適切である。	量・質ともに評価の対象である。
	指示は適切である。	明確さ・簡潔さを見る。
授業運営	授業の目標・各活動の目的を伝えている。	
	生徒の活動状況を確認しながら授業を進めている。	確認とは，モニタリング・生徒に直接聞くなどの行為。
		生徒を注意したりして活動に参加させることも含む。
諸活動のつながり	目標達成に適した活動をさせている。	各活動をスムーズに，または効果的にさせているかを見る。
	目標達成に適した活動の配列である。	時間配分も含む。
生徒への対応	生徒の発言や答えをクラス全体で共有している	
	生徒の発言や活動に対し，適切に対応している	正答へ応答（ほめる）。
		誤答や無答への対応。
		生徒の発表・質問・活動への応答。

（資料２）評価シートの改訂（９月実習に向けて）

評価の領域		評価項目	検討内容	改訂案
①	教師の英語	明瞭でわかりやすい英語を話している。	実習生の使う英語についての評価項目であり，ひとつにまとめられる。	正確な英語を使用している。
		誤りがほとんどなく、あっても言い直している。		
	指導技術	計画に基づき、内容を反映させる板書である。	板書で一括し指導技術に入れる。	整理された板書ができる。
		板書に一貫性があり、内容が整理されている。		
	諸活動のつながり	板書を使い、活動の関連がわかるようにしている。		
	指導技術	様々なタイプの活動をさせ、生徒が英語を多用している。	活動の種類や数は指導案を見る段階で評価できる。実習授業では，計画した活動が効果的な学習になるように実施できているかを評価すべきである。	言語の使用場面に配慮した活動をさせている。
		自然な言語活動の場面を意識した活動をさせている		
	授業運営	机間指導をし、苦手な生徒をサポートしている。	机間指導をすることが評価の対象ではない。生徒が理解しているか，活動の様子はどうかをしっかり把握しながら授業を進めているかをとうべきである。また，苦手な生徒、活動が進んでいない生徒への指導が行き届いているかを評価すべきである。	生徒の活動状況を確認し，必要に応じて個別指導している。
		生徒の様子を確認しながら、授業を展開している		
		生徒の活動状況に応じ、柔軟な対応をしている。		
		生徒をよく観察し、生徒の理解に応じた対応をしている。		
	諸活動のつながり	目的を達成するために活動に有機的なつながりを持たせている。	必ずしもそれぞれの活動の配列が易→難へと進む必要はない。授業の目標を達成する為に効果的であればよい。また，活動は自体は，指導案で評価できる。活動を効果的に行わせるためにどのように生徒を動かしているのかを評価すべきである。	目的達成に適した活動をさせている。
		活動は易から難へと移行しており、学習者に過度な負担となる飛躍がない。		活動間に有機的なつながりを持たせている。
	生徒への対応	生徒の誤りを予測し､原因を考えた対処をしている	生徒が間違ったり，答えられなかった原因を，実習生が素早く見つけ，その対応を臨機応変に行うことが，教育実習の要求度としては高すぎるのではないか。ここでは，生徒の発言等に柔軟に対応できているかを評価すべきである。	生徒の発言や活動に対し，適切に対応している
		生徒の理解に応じて臨機応変に説明を加えている		
②	教師の英語	生徒の学力を考慮しながら英語を使用している。	実習生が生徒の学力を判断するのはむずかしい。実習授業では，「この時期の生徒ならこの程度の英語が使えるだろう」という配慮のもとで英語を使用しているかを評価すべきである。	既習事項に配慮している。
③	授業運営	常に全体で考え方を共有させている。	生徒からの答えや意見をまとめたり整理することでクラス全体で共有することはむしろ「生徒への対応」のところで評価してよい。	生徒の考えをまとめたり，整理してクラス全体で共有している。
④	教師の英語	不必要な日本語がない。	英語で授業を運営することが基本である。また，何が「不必要な日本語」か判断しにくい。	削除
	授業運営	生徒の学力差を意識し、基本的な活動から発展的な内容まで取り入れている。	指導案の段階で評価できるものである。また，難易度の高低を網羅した活動を計画しなければならないとは限らない	
⑤	内容理解の展開		「内容理解」は授業の活動の中身の一部分であり，他の規準と性格を異にしている。 「内容理解」のために「発問」や「指示」「説明」をどのように行っているかに評価の焦点をあてるべきである。	評価規準の「指導技術」に整理して加える。
⑥	指導技術		「内容理解」の削除に伴い，この規準に設けられていた評価項目を整理し加える。	発問は適切である。
				説明は適切である。
				指示は適切である。
	授業運営		授業や活動の目標・目的を明らかにすることで生徒の授業や活動への関心や意欲を高めることができ，授業運営上、効果的である。	授業の目標・各活動の目的を伝えている。

評価シートの改訂（10月実習に向けて）

①	指導技術	整理された板書ができる	「できる」という能力を評価するのではなく，板書がきちんと整理されていることを評価すべきである。	整理された板書である。
②	活動のつながり	諸活動に有機的なつながりを持たせている	「有機的なつながり」とはどのようなことをいうのか曖昧で，評価時に判断しにくい。 活動が授業の目標達成のために，効果的につながっていることや様々な種類の活動をどのように実施しているかを評価すべきである。	目標達成に適した活動の配列である。

（資料３）評価シート

English Department
Fukuyama Jr. and Sr. High School attached to Hiroshima University

ASSESSMENT OF PERFORMANCE IN TEACHING

実習生名:＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　　DATE ＿＿／＿＿

Lesson Observation: 1 2 3 4 5　　Lesson/Unit ＿＿＿＿＿＿＿＿
Jr. High 1 2 3
Sr. High Grade: 1 2 3　　I II OC I OC II R W

評価領域	評価項目		備考
1 教師の英語	・正確な英語を使用している		
	・既習事項に配慮している		
2 指導技術	・教具や教材を適切に用いている		
	・整理された板書である		
	・発問は適切である		
	・説明は適切である		
	・指示は適切である		
3 授業運営	・授業の目標・各活動の目的を伝えている		
	・生徒の活動状況を確認しながら授業を進めている		
4 諸活動のつながり	・目標達成に適した活動をさせている		
	・目標達成に適した活動の配列である		
5 生徒への対応	・生徒の発言や答えをクラス全体で共有している		
	・生徒の発言や活動に対し、適切に対応している		

指導者: ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿